

漢字習得におけるルビの有効性の解明⁽¹⁾

棚橋尚子

1. 研究の目的

本研究の目的は、漢字に付されたルビが児童の漢字習得にどのように影響するか、真に有効であるのかということの解明にある。

近年、新聞等においても常用漢字表外の漢字にルビを付す形のいわゆるルビ付き表記がよく見られるようになった。ルビ付き表記には、一つの熟語を漢字とかなで交ぜ書きすることでの意味のとらえにくさを回避するねらいがある。

また、小学校の国語科教科書においてもルビ付き表記は増加する傾向にある。現在、ある教科書会社の国語科教科書では漢字提示熟語の割にルビが付されているという状況にある。もともと固有名詞などの頻出で、ルビ付き表記が多用される社会科等とは異なり、国語科教科書は学年別漢字配当表にかなり拘束される実態があった。

さらに、伝統的な、いわゆる名文を音読することがブームになり、児童の目に触れる文章が総ルビ表記をとることも多くなってきた。ブームを作った一人である齋藤孝は「総ルビ方式は、漢字の読み方に習熟するために効果的であると同時に、子どもが大人の世界に入っていくための大切な道筋です。」⁽²⁾と、漢字習得との関連の中での総ルビ表記の意義を述べている。また、最近小学生用に出版される国語辞典は、従来の、一部の漢字に割りルビで読み方を書き示す表記から総ルビ表記に転換する傾向にある。このことは、なるべく幼いうちから国語辞典に親しませるための手だてのひとつだと言えるが、漢字を積極的に用いることでかなり難解な語彙が語釈中に割り込むという皮肉な実態も存在することとなった。

漢字にルビが付されることは漢字習得の一助になりうるか。本研究においては、教師の意識調査と、児童に対する漢字習得調査を柱にしてその問題を解明しようとする。

2. 本研究における問題の整理

2. 1 社会情勢とルビ

「ルビ」の名称は、活版活字の振り仮名の大きさ（5.25ポイント）にもっとも近い欧文活字の呼び名であるルビー（5.5ポイント）に由来する。したがって「ルビ」は活字に伴う用語であり、手書きで漢字の読みを示す場合、それは、振り仮名、読み仮名のように呼ば

れる。

日本の児童・生徒にとって漢字の習得は学習時間を多くさかれるものであり、負担感も小さいとは言えない。この漢字学習負担の問題は戦前から指摘されており、たとえば、1937年に近衛文麿を会長として設立された国語協会発行の『国語運動』創刊号ではこの問題を複数の書き手が取り上げている。中でも国分一太郎は教科書の用語が難解なことに言及した上で「どの教科書にも、すべてフリガナがついていたら、ぼくらはまだまだ国家のためにより仕事ができるような気がする。⁽³⁾」と、総ルビ表記を歓迎する見解を示している。

1946年にG.D. ストダードを団長とするアメリカ教育使節団から国語表記ローマ字化の勧告を受けたのも、漢字習得上の負担が日本人児童生徒の他の能力の伸長を阻害しているという判断があったからであった。さらに、戦前は日常の漢字をかなり恣意的に使用していたため、小学校で千程度の漢字を習得しても一般社会ではそのことが役立たないという状況も存在した。

目を転じて日本語表記を概観すると、日本語は漢字仮名交じりの形式をとりながらも、表音文字の片仮名、平仮名のみで書き表すことが可能である。しかしながら、元来日本語は表意文字と表音文字とを混在させることで言葉を際立たせる表記法をとってきたため、語句の切れ目で言葉をくぎるという書き方には慣れていない実態がある。そのため、書き手の意識として分かち書きはわずらわしく、また、分かち書きしたところで言葉の意味はつかませにくいという事態が起きる。漢語由来の言葉が多く、同音異義語が多いという日本語の特徴もその点に拍車をかけることになる。ルビに脚光が当たるのはまさにこの一点であり、表記としてのわかりやすさと、文脈としてのわかりやすさを同時に成立させようとするものがまさしくルビなのである。

しかし、ルビはいわば「両刃の剣」であり、難語句の使用を逡巡させない意識を書き手にもたせる可能性が高い。1938年に山本有三が『戦争と二人の婦人⁽⁴⁾』の後書きで「不愉快な小虫」とし、「文明国でありながら、その国の文字を使つて書いた文章が、そのまゝでは国民の大多数のものには読むことが出来ないで、いつたん書いた文章の横に、もう一つの文字を列べて書かなければならないといふことは、国語として名誉のことでせうか」、「こんななまげな国字の使ひ方をしてゐるのは、文明国として実に恥ずかしい」と批判したルビの使用背景には江戸期以来の漢文尊重教養主義の文体が存在したのである。山本の主張はいわば平明な言葉を使った文体の推奨にあった。

この問題は、現代において日本人だけではなく日本居住歴の浅い外国籍の人々にもかかわる問題である。このことに関し野村雅昭らは、日本語は日本人だけではなく日本で暮らす母語を日本語としない人々のためのものでもあるとし、漢字表記を減らすべきだという主張をしてきた⁽⁵⁾。しかし、もはや我が国は人名用漢字のみならず常用漢字の増加を念頭にした漢字表記見直しの時期に入っており、一般社会で使用する漢字がこの先少なくなるという事態は起こりえない。ただ、その際にルビが漢字を補助しうるかと言えば、そうとは

言い切れず、もともと母語を日本語としない人々には理解困難な語彙が頻出する可能性を否定できない。

同様のことが、義務教育の学習者にも言える。ルビは漢字の読みを補助はするが、語義まで支援することには限界がある。そればかりか、ルビの多用が内容理解や学習意欲の形成に負の側面をもたらす場合もあり得る。次節ではその問題について考えてみたい。

2. 2 学習者にとってのルビ

1995年に文化庁が行った『国語に関する世論調査』では、同一熟語のルビ付き漢字表記と漢字仮名交ぜ書き表記とを比較する質問項目が取り上げられた。その結果、半数以上の回答者が「ルビ付き」を好感した。その背景には意味のとりやすさや「見慣れ」の安心感が存在すると考えられるが、成人と漢字習得期の児童生徒が同じ傾向を示すか否かは即断できない。

基本的に児童生徒、特に小学校児童が目にする表記は、漢字と仮名の交ぜ書きであることが多い。それは、教科書の表記が原則として学習指導要領に示された学年別漢字配当表に基づいているからである。小学校教科用図書（本論文中では教科書と記述。）における漢字提示のあり方については義務教育諸学校教科用図書検定基準（1999年1月25日文部省告示第15号）により概略が決められている。国語科においては「『学年別漢字配当表』に掲げられている漢字以外の漢字を必要に応じて使用することができる」という原則の下、その例として「ア 固有名詞」「イ 専門的な用語」「ウ 学習上特に必要と認められる漢字」が挙げられている。さらに、そのような漢字について単元ごとの初出の際に「読み方を示す」ことが決められている。他教科においてもこの原則は生きており、固有名詞、専門用語についてはルビ付きの漢字で示されることが多い。

しかしながら、教科書中の日常的な熟語は交ぜ書き表記をとることが多い。たとえば、第2学年において「科学者の発見」という字句は「か学しゃの はっ見」と表記される。「学」と「見」は第1学年に配当されている既習漢字であり、その他の漢字は未習であるためである。そして、交ぜ書きによる読みにくさを回避するため、文節ごとの「分かち書き」表記をとる。むろん、学年が上がるに従い交ぜ書き表記の割合は減少し、第3学年からは分かち書きもされなくなるが、国語科の場合、見直されながらも学年別漢字配当表の拘束は他教科に比して強く、学年が上がっても文章中に交ぜ書きの熟語が散在することになる。

その一方で、国語科以外の教科においては、その内容や専門性によってルビ付き漢字表記が頻出する場合がある。特に第6学年社会科の日本史分野にはルビ付き固有名詞の出現割合がかなり高くなる。

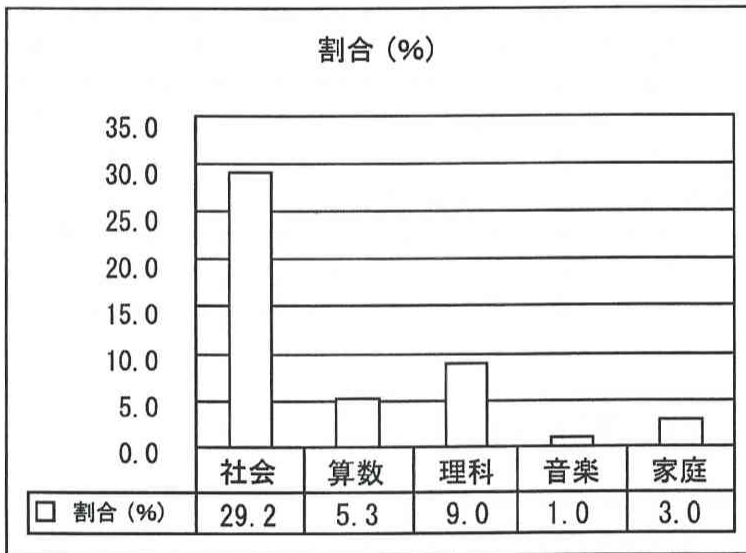
問題は、このような実態が学習者にどのように受け取られているかということである。

本節では、筆者が行った3種類の調査からその問題を考えていきたい。一つ目は「表記の好感度と漢字習得実態について」である。これは第6学年の児童を対象に、①正書法表

記、②総ルビ表記、③パラルビ表記、④交ぜ書き表記、の好感度と漢字習得との関係を調査したものである。その結果、第6学年ともなると、漢字習得の実態にかかわらず成人同様交ぜ書きを敬遠する傾向があるが、漢字習得の度合いが低い群になるほど、交ぜ書きを好感する児童の割合が高くなることがわかった。

この調査と類した結果を見せたのが、「漢字の多さと教科の好悪との関係」である。この調査では「国語以外の教科書を読んで、漢字が多くていやだなと思ったことはありますか」の問いに、301名中95名（31.6%）が「ある」という回答を選択した。以下のグラフは教科別の割合である。

漢字がいやで嫌いな教科の割合（複数回答可）



グラフからは固有名詞が多い社会科や、社会科ほどではないものの専門用語が多い理科が高い割合を示していることがわかる。そして、この結果についても漢字習得度との間に相関関係が存在することがわかった。もちろんこの結果は、児童たちの微妙な心理の反映であって、教科自体への抵抗感との倒錯と見ることもできないわけではない。しかしながら、一般的な調査において高学年で「嫌いな教科」の第1位となる算数⁽⁹⁾が5.3%と低い割合を示していることを勘案すると、漢字表記そのものが児童に与える負担感は看過できない重みを持って我々に迫ってくる。

一方で、交ぜ書きとルビ付きとで表記した同一の文章を音読させる調査では、明らかにルビ付き漢字表記の方が字句の把握が容易にでき、音読がしやすいという結果が得られた。したがって、児童の表記への意識はどうあれ交ぜ書きよりもルビ付き漢字表記の方が意味をとりやすく「実際的」だということは言える。ただ、学習を進める原動力が学習者の意欲にあると考えた場合、識者たちが「ルビ付きがよい」と連呼することへの懐疑が私には常に存在する。本研究では、以上のような点を踏まえ、「ルビは漢字の習得に有効か」という1点を追究していきたいと考える。

2. 3 漢字習得の位相

ところで、一口に漢字習得と言っても、その内実のとらえ方は言葉の使い手によって様々である。たとえば、パソコン上での変換はできてでも実際の書字はできない、読めるが書けないといった場合など、その漢字を習得できているか否かを断定することには躊躇がつきまとう。また、複数の音訓のすべてが読み書きできなければその漢字を習得したとは言えないと言った場合、異論が出るであろうことは想像に難くない。音訓すべての読み書きということは、その漢字を含む膨大な数の熟語の読み書きをも意味するとも考えられるからである。そのようなことは成人でも困難である。さらに、点画などの字形細部をどうとらえるかという点も実際の教育現場では問題となる。必要以上に字形細部に留意して「書き取り」を評価する教師も決して少なくない⁽¹⁰⁾。次章では、児童を対象にした調査とともに、教師の意識調査について考察するが、その点の了解は回答した教師それぞれに微妙に異なるであろうことをあらかじめ記しておく。

3. ルビの有効性に関する調査

3. 1 成人はルビをどうとらえるか

ルビ付き漢字表記を目にしていることは本当に漢字の習得につながるのか、そのことについて成人はどのように子どものころを振り返るかという点を解明し本題に迫るために、教師を対象にした意識調査を行った。

3. 1. 1 調査方法

調査対象 日本国語教育学会名簿より無作為に抽出した会員 250 名。

調査年月 2006 年 2 月。

調査方法 質問紙（B4用紙1枚）送付、返信葉書による回答回収。

回答者数 108 名（回収率 43.2 %）。

質問項目 以下、質問紙に掲載したとおりに記す。

1. 性別をお答えください。
① 男性 ② 女性
2. 年代をお聞かせください。
① 20代 ② 30代 ③ 40代 ④ 50代 ⑤ 60代以上
3. 現在のご勤務校種等をお聞かせください。
① 幼稚園 ② 小学校 ③ 中学校 ④ 高等学校 ⑤ 大学・短大 ⑥ 教育委員会
⑦ その他()
4. 小学生のころ、漢字を覚えることが得意でしたか。
① 大変得意だった ② 得意だった ③ どちらでもない ④ 不得意だった
⑤ 苦手だった
5. 小学生のころ、読書をよくされましたか。
① 大変よくした ② よくした ③ どちらでもない ④ あまりしなかった
⑤ 全然しなかった
6. 小学生のころ、ルビを付けてある文章を読んでいて自然に漢字が覚えられたという自覚が
おありでしたか。
① 大変ある ② ある ③ どちらでもない ④ あまりない ⑤ まったくない
7. 「6」で①、②に○を付けられた先生のみにお聞きします。「読み」のみでなく漢字の
「書き」まで自然に覚えられたという自覚が
おありですか。
① 大変ある ② ある ③ どちらでもない ④ あまりない ⑤ まったくない
8. 漢字ルビは漢字習得(読み)に有効だと思われますか。
① 大変思う ② ある程度思う ③ どちらでもない ④ あまり思わない
⑤ まったく思わない
9. 漢字ルビは漢字習得(書き)に有効だと思われますか。
① 大変思う ② ある程度思う ③ どちらでもない ④ あまり思わない
⑤ まったく思わない
10. 「8」「9」について、理由をお聞かせください。また、漢字ルビについてなにかご意見
があればお聞かせください。

ここでの質問は分析のための観点として考えた、性別、年代、職種といった回答者の属性にかかわる問い(1. ~3.)と、小学生のころの国語的活動への興味関心(4. 5.)、ルビと漢字習得との関係に関する意識(6. ~10. 自由記述を含む。)から構成されている。国語への興味関心にかかわる項目のうち質問4. は漢字習得に関する優越意識を尋ねている。質問5. については、読書経験の多少を尋ねている。質問4. 5. とともに自覚的意識にかかわる内容であり、回答者の主観に基づくものであるが、むしろ国語への有為感がルビの効果の自覚にどう影響するのを知りたいところであった。

3. 1. 2 結果と考察

この調査については、回答票（返信葉書）に1から108までの通し番号を付け単純に集計を行った。回答者の属性は以下の通りである。

性別	男性	52名	女性	56名						
年代	20代	2名	30代	13名	40代	34名	50代	50名	60代以上	9名
校種	幼稚園	0名	小学校	89名	中学校	3名	高等学校	1名	大学・短大	0名
			教育委員会	6名	その他	7名	(無職・自営業など)	無回答	2名	

今回の調査では属性による強い特徴が見られなかったため、全体を対象にした結果を提示する。

質 問 文	回 答 (肯定→否定：除無回答)				
	①	②	③	④	⑤
4. 小学生のころ、漢字を覚えることが得意でしたか。	17	50	31	7	3
5. 小学生のころ、読書をよくされましたか。	26	46	20	13	2
6. 小学生のころ、ルビを付けてある文章を読んでいて自然に漢字が覚えられたという自覚がおありでしたか。	11	43	24	25	5
7. 「6」で①、②に○を付けられた先生のみにお聞きします。「読み」のみでなく漢字の「書き」まで自然に覚えられたという自覚がおありですか。	1	18	17	24	2
8. 漢字ルビは漢字習得（読み）に有効だと思えますか。	21	70	7	7	2
9. 漢字ルビは漢字習得（書き）に有効だと思えますか。	3	36	27	38	3

この結果を概観すると、ルビが漢字の習得に有効だったと感じている回答者（質問6.）はちょうど半数である。また、そのうち「書き」にまで有効性があったとする回答者（質問7.）は①と②とを合わせて19名であり、質問7. の回答者の30.6%を占め、全回答者の17.6%にあたる。この結果は、質問9. で「漢字ルビは漢字習得（書き）に有効」とする者の数値36.1%（39名）と一見齟齬を来たしているように見えるが、自身の経験上はルビの効果が感じられなくとも、指導者として学習者としての児童・生徒と接した場合に効果を感じる教師が一定割合存在するということになる。

(1) 漢字習得の優越意識とルビ有効意識との関係

小学校のころの漢字習得優越意識が、ルビの有効性の自覚化にどう影響しているか、質問4. と質問6. との関係について分析する。なお、母集団の数が多いとは言えないので、質問4. の「小学生のころ、漢字を覚えることが得意でしたか。」については、回答①の「大変得意だった」と回答②の「得意だった」を合わせて「得意群」、回答③の「どちらでも

ない」を「中間群」、回答④の「不得意だった」と回答⑤の「苦手だった」を合わせて「苦手群」とする。

表1 漢字優越意識とルビ有効性自覚

グループ (数)	ルビの有効性に対する回答				
	①大変ある	②ある	③どちらでもない	④あまりない	⑤まったくない (%)
得意群 (67)	11.9	43.3	20.9	20.9	3.0
中間群 (31)	6.5	35.5	25.0	25.0	6.5
苦手群 (10)	10.0	30.0	20.0	30.0	10.0

回答者が教師でありさらに国語教育の関係者であることも手伝い、漢字学習については半数以上が得意だとしている。また、表1では、群による明らかな差異は認められず、漢字を覚えることが得意だったかそうでないかという意識とルビの有効性の自覚との間には、この調査の範囲では相関関係がないと結論できそうである。

(2) 読書経験とルビ有効意識との関係

小学校のころの読書経験がルビの有効性の自覚化にどう影響しているか、質問5. と質問6. との関係について分析する。なお、(1) 同様、母集団の数が多いとは言えないので、質問5. の「小学生のころ、読書をよくされましたか。」については、回答①の「大変よくした」と回答②の「よくした」を合わせて「多読群」、回答③の「どちらでもない」を「中間群」、回答④の「あまりしなかった」と回答⑤の「全然しなかった」を合わせて「寡読群」とする。

表2 読書経験とルビ有効性自覚

グループ (数)	ルビの有効性に対する回答				
	①大変ある	②ある	③どちらでもない	④あまりない	⑤まったくない (%)
多読群 (73)	13.7	47.9	23.3	9.6	5.5
中間群 (20)	5.0	25.0	20.0	45.0	5.0
寡読群 (15)	0.0	20.0	20.0	60.0	0.0

この設問に関しても、一般成人ではこのような結果は求めにくいだろうという分布を示している。ところが、この結果は質問4. の漢字習得の優越意識の項目とは異なり、明らかに読書をしている層がルビの有効性をより自覚化していることが看取できる。読書をすることは必然的にルビ付き漢字表記を目にする機会をもつことになるためであり、読書そのものが漢字習得の一助になることが窺える結果だと言える。

(3) 自由記述からみえること

質問10. の「8」「9」について、理由をお聞かせください。また、漢字ルビについてなかご意見があればお聞かせください。」は、自由記述欄であるが、全108名中75名の回答者の記述があった。⁽¹¹⁾なかには「ルビのある無しで漢字習得に有効であるかどうかは私も知りたいことです。(男性・30代・小学校)」のようにこの調査に関心を示す回答者も複数存在した。自由記述において最も目立った意見は「ルビは漢字の読みの習得には有効である。」というものだった。以下に示す記述はそれらのごく一部である。

- ・ 漢字ルビは、読めなかった漢字が読めるようになるという点で(読み)の漢字習得には有効であると思う。しかし、本を読んでいる途中で、なかなか書く練習はしないので、書けるようになるには、別の練習が必要と思う。(女性・40代・中学校)
- ・ ルビは読みには有効であると思うが、書きは?であると思う。(女性・30代・小学校)
一方で、「有効でない」という意見も存在した。それは「漢字を覚えようという気持ち(意欲)がなければ、ルビのみに目がいって読んでしまい、ルビがなければ読めないのではないか。(女性・50代・小学校)」という意見や、「漢字そのものを読み、書くというよりルビをたよることが多いのではないか。(男性・60代以上・その他)」という意見に代表される「ルビがかえって漢字そのものを意識させなくなる」という危惧である。

また、ルビと読書意欲との関係を指摘する声も少なくなかった。それはルビがあることで本文が負担なく読め、読書が楽しくなるというものである。さらにそのことで漢字を覚えようとする意識も高まるといった指摘もあり、回答者の中には「ルビ→読書→漢字習得」という道筋を描くものも多数存在した。以下は、その一例である。

- ・ 書けなくても読めることで理解が進み、読書も楽しくなると思われる。読書離れがいわれて数年経つが、ルビがふられた書物は、児童にとって読みやすいのではないかとと思われるのと同時に自然と習得しているのではと考える。(女性・50代・小学校)

回答者の自由記述からかいま見えることは、多くの教師がルビに一定の効果を認めながらも、経験則だけでものを言うことのもどかしさを感じているということである。次節では、実際の小学生を対象にした調査に基づきルビの漢字習得における効果を考えていく。

3. 2 児童を対象にしたルビの有効性に関する調査

ルビ付き表記の漢字を目にすることで、漢字は習得できるのか、また、その習得のレベルは「読み」とどまるのか、「書き」まで達するのかという点を明らかにするために、教科書教材の一部の平仮名表記をルビ付き漢字表記にした教材を作成し、通常の教科書を使用する児童との間で読みと書きとの結果に差が出るか、比較調査を行った。

3. 2. 1 調査方法

調査対象 赤穂市立赤穂西小学校、奈良市立飛鳥小学校、箕面市立北小学校、奈良市立大安寺西小学校、奈良市立椿井小学校、枚方市立西長尾小学校、赤穂市立御崎小学校（校名五十音順）の第3学年、第4学年、第5学年、第6学年の児童。

調査年月 2006年2月～3月。

調査形式 調査用紙（A4版横置き、縦書き1枚）に基づくテスト形式。

調査材料 光村図書出版株式会社に許可を取り国語教科書の以下の教材を使用した。

第3学年「モチモチの木」（斎藤隆介）、第4学年「ごんぎつね」（新美南吉）、第5学年「大造じいさんとガン」（椋鳩十）、第6学年「海の命」（立松和平）。

回答者数 第3学年449名、第4学年424名、第5学年495名、第6学年331名。計1699名。

調査方法 児童を実験群（事前学習無し）と対象群（事前学習有り）とに分ける。実験群の児童には調査のために作成したテキスト（教科書と同じ体裁のカラー刷りのもの）を与え、そのテキストを使い単元の学習をさせる。なお、テキスト中の字句のうち10個は教科書とは異なるルビ付き漢字表記に改めてある。対象群の児童には教科書を使って学習させる。それぞれの学年でルビ付きに変えた字句は以下の通りである。

第3学年 眠る、熊、冷やす、粉、洪水、夢、腹、泣く、初めて、忙しい。

第4学年 穴、干す、増す、網、袋、井戸、葬（式）、伸びる、栗、盗む。

第5学年 沼、呼ぶ、輝く、異常、知恵、暁、肩、銃、姿、突然。

第6学年 自慢、頼む、釣り、嵐、輝く、真珠、幻、穏やか、笑顔、娘。

手続き 担当教員に以下のような依頼をした。用語等が不統一になるがそのまま提示する。

調査の対象

この漢字調査に際し、学級によっては調査のために事前に冊子をお配りいたしました。この漢字調査は冊子のあるなしにかかわらず3、4、5、6年生のすべての学級で行ってください。

- (1) あらかじめ教材冊子をお渡しして授業を行っていただいた学級は、その教材の終了後をお願いします。
- (2) 冊子のお願いをしなかった学級はいつでも結構です。

配布用紙

調査用紙は各学年AとBの2種類あります。恐れ入りますがAとBの用紙が学級人数の半分ずつになるよう配布してください。（40人学級ならAが20名、Bが20名。一人の児童はA、Bどちらか1枚を解答することになります。）

調査方法・時間

調査は、用紙を配っていただき始めと終わりの合図をしてくださるだけで結構です。調査時間は、5分でお願いします。学級の実態によって多少の前後があるのはかまいません。いちおうすべての児童が一通り問題に接することができるようにお願いします。

回収

回収後は同封の回収袋に入れていただき（A、Bは混在していかまいません）、回収表の必要事項欄に必要事項をご記入ください。

採点等

採点は大学の方で行います。先生方には回収までをよろしく願いいたします。

依頼文にもあるように、「配布用紙（調査用紙）」はA、B2種類を用意した。ルビ付き表記が、漢字習得上、読みと書きの双方に有効かを調べるためには問題は両者に及ぶ必要がある。ルビを施した10個の字句のうち、半数は読みの問題、残りは書きの問題とすることにして、A、B2種の調査用紙の読みと書きとを交換し、10の字句すべての読み書きの結果を求められるようにしたのである。

このほか、口頭で、実験群の児童がルビの漢字に気を取られないよう、授業内でその漢字にふれないようにという依頼を担当教員に対しておこなった。

3. 2. 2 結果と考察

採点は、以下のような採点基準を設け筆者とアルバイト⁽¹²⁾で行った。

- ・ 個々の解答については正解か不正解かのいずれかとし、部分点は与えない。
- ・ この調査で対象となる漢字のみならず、ルビ付きの熟語をすべて書いていて正解とする。まれに、対象となる漢字を書けていて既習漢字が書けていない児童がいるが、その場合は不正解とする。たとえば、第6学年の「笑顔」で「笑」だけが書けている場合は不正解となる。
- ・ 送りがなは採点の対象としない。

(1) 集計結果と事前学習の有無による有意差の測定

採点の結果は以下の通りである。採点の結果と分析に基づくp値を表に掲げる⁽¹³⁾。

表3 第3学年の集計

	事前学習有り (172人)		事前学習無し (277人)		p値
	合計点	平均点	合計点	平均点	
読みテスト	691	4.02	955	3.45	0.000
書きテスト	126	0.73	95	0.34	0.000

表4 第4学年の集計

	事前学習有り (175人)		事前学習無し (249人)		p値
	合計点	平均点	合計点	平均点	
読みテスト	769	4.39	946	3.80	0.000
書きテスト	287	1.64	321	1.29	0.003

表5 第5学年の集計

	事前学習有り (165人)		事前学習無し (330人)		p値
	合計点	平均点	合計点	平均点	
読みテスト	756	4.58	1362	4.13	0.000
書きテスト	284	1.72	493	1.49	0.12

表6 第6学年の集計

	事前学習有り (141人)		事前学習無し (190人)		p値
	合計点	平均点	合計点	平均点	
読みテスト	684	4.85	878	4.62	0.001
書きテスト	343	2.43	348	1.83	0.000

事前学習が効果的か否かはp値によって判定できる。この場合、第5学年の「書き」については $p > 0.05$ となり有意差は認められないが、そのほかの学年の読みと書き、および第5学年の読みについては $p < 0.01$ のため有意水準は1%以下となり、「極めて有為である」と判断できる。したがって、漢字ルビを付した漢字を目にすることが漢字の読みばかりか、書きの習得にまで影響を与えることが理解できた。

4. 研究の成果と課題

本研究を通して、従来経験則でしか語られてこなかったルビの効果が証明できた。しかも、3. 1. のアンケート調査に参加した多くの教師の思いとは異なり、ルビが漢字の書きの習得にまで影響を与えていることをも検証できたことは、漢字教育界においての大きな成果となったと考える。漢字を何度も目にすること、そしてそのたびにルビによって読みが与えられる状態になっている状況が、児童にその漢字を認識させ字形までをも獲得させる

ことになるのである。教師を対象にした調査で、読書経験とルビの効果の自覚に相関関係があったという点もここにいたって納得できる。

一方で課題も残った。児童の調査用紙を採点していて、ある学校のある学級だけが際だってよく書いている漢字に複数遭遇した。クラス担任や友人などの身近な人にその漢字を使う名前の人がいるのかもしれない。今回の調査はそのような微妙な条件を無視して実施したが、今後同様の調査を行う場合は、できるだけ条件を整備して臨みたいと考える。また、今回の児童を対象にした調査では、「2. 3. 漢字習得の位相」で考察したうちの、当該音訓だけに限った習得を測定したのみとなった。今回の調査の目的自体はそれで達成できていると考えるが、この調査を機に、児童の漢字習得のメカニズムを改めて考察していきたいと考える。

さらに、実際の教育現場では、学習放棄のような形で本を読むのすら嫌だととらえる児童も存在する。ルビは、大半の児童には有効だと結論できるが、そこから漏れる児童をどう指導するかという問題は重要である。特に意欲面の支援をどう図っていくかという点を今後の課題としていきたい。

注

- (1) 本論文は筆者の平成15年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究C(2))研究報告書(課題番号15530589)の内容を加除修正したものである。
- (2) 齋藤孝『理想の国語教科書』文藝春秋(2002)
- (3) 国分一太郎「せめてもの願い」国語協会『国語運動』1巻1号(1937)
- (4) 山本有三『戦争と二人の婦人』岩波書店(1938)
- (5) 野村雅昭「漢字を使わない日本語へ」加藤秀俊監修・国際交流基金日本国際センター編『日本語の開国』TBSブリタニカ(2000)など。
- (6) 棚橋尚子「漢字ルビに対する児童の反応—実態調査を通して—」国語教育探究の会『国語教育探究』第12号(1999)に詳述。
- (7) 日本語にはいわゆる正書法は存在しないが、この調査では常用漢字表の範囲の漢字を漢字で表記したうえで、ルビを一切振らない表記法を便宜的にこう呼ぶことにした。
- (8) この場合、常用漢字表の漢字の中で、未習、初出のものにのみルビをつけた。
- (9) 日本数学教育学会調査(1998)など。
- (10) 棚橋尚子「主体的な言葉の学び手の育成に向けて—語彙指導としての漢字教育を考える—」日本国語教育学会『月刊国語教育研究』329(1999)の調査など。
- (11) 自由記述については、明らかな誤字は訂正したが、基本的に原文通りとした。
- (12) 伊藤輔、岡田麗央、土井好美、福光亮平、山本ひとみの5名。(以上奈良教育大学学生および卒業生)
- (13) 分析はクラブ・タカハヤネット(京都府宇治市、代表出雲井準麻)による。

(本学教授)